

《担当者名》教授 / 飯塚 健治  
 教授 / 遠藤 泰 教授 / 泉 剛 教授 / 柳川 芳毅 准教授 / 大橋 敦子 准教授 / 町田 拓自  
 講師 / 鹿内 浩樹 講師 / 水野 夏実

【概要】

薬物治療を実践するに当たって、様々な疾患の病態やその背景並びに臨床経過を理解することは極めて重要である。病態生理総論では、いくつかの代表的な疾患についてその病態・病因、並びに関連する病態生理学的な背景などについて学び、各論となる今後の薬物療法学 ~ で学修するための基礎となる知識を修得する。

【学修目標】

日常遭遇する頻度の高い主な疾患・病態について臓器別に列挙し、その病因・病態を理解し、薬物治療を行うに当たって必要な理論的根拠を説明できる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
1	心・血管、循環器系疾患 資料を配付する。	高血圧、低血圧の発生機序、病態並びに治療方針を説明できる。 不整脈の発生機序や病態並びに治療方針について簡単に説明できる。 心肥大、心拡大、心筋症、弁膜症、虚血性心疾患および心不全の病態、発生機序並びにその治療方針について簡単に説明できる。  《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(3)- -1~5	飯塚 健治
2	骨・関節、代謝、内分泌、生殖系疾患 資料を配付する。	糖尿病、高脂血症、ビタミン欠乏症などの病因、病態の成立、合併症の経過、予後を説明できる。 痛風の病態の特徴、病因、経過に応じた治療法を説明できる。 骨粗鬆症の成因、関連生体因子との関係、治療法を説明できる。 変形性関節症、肩関節周囲炎の病態、病因、経過に応じた治療法を説明できる。 甲状腺機能亢進症、甲状腺機能低下症、副腎機能異常症、尿崩症などの発症機構を説明できる。  《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(2)- -2~4 E2-(5)- -1~3、 -1~5	大橋 敦子
3	消化器系疾患 資料を配付する。	急性肝炎、慢性肝炎、肝硬変などの病態を説明できる。 肝疾患における病因と血液生化学的検査値との関係を説明できる。 胃炎、膵炎などの成り立ちを理解し、簡潔に説明できる。 消化器潰瘍の成り立ちと症状について理解し、簡潔に説明できる。 炎症性腸疾患として、クローン病、潰瘍性腸症候群などについて説明できる。  《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(4)- -1~8	遠藤 泰
4	腎・尿路系疾患 資料を配付する。	腎炎、ネフローゼ、腎不全などの病態を理解し、簡潔に説明できる。 腎疾患における病因と電解質代謝異常、血液生化学的検査値との関係を説明できる。 排尿調節機構を理解し、簡潔に説明できる。	水野 夏実

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
		<p>前立腺肥大および神経因性膀胱など代表的な排尿障害の病態を理解し、薬物治療の目的や根拠を説明できる。</p> <p>《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(3)- -2~8</p>	
5	呼吸器系疾患 資料を配付する。	<p>気道、気管支、肺疾患の病態を理解し、合併症の成り立ちを説明できる。 気管支ぜん息、慢性閉塞性肺疾患などの病態を理解し、簡潔に説明できる。</p> <p>《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(4)- -1~3</p>	鹿内 浩樹
6	皮膚、感覚器系疾患 資料を配付する。	<p>眼、耳など主な感覚器の調節機構について説明できる。 緑内障、白内障などの眼疾患の成り立ちと病態について説明できる。 めまいなど感覚器障害に起因する疾患の成り立ちと病態について説明できる。</p> <p>《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(6)- -1~3, -1,2, -1~4</p>	大橋 敦子
7	神経・筋、精神・中枢神経系疾患 資料を配付する。	<p>パーキンソン病などの神経変性疾患および統合失調症の病因と病態を説明できる。 躁うつ病や不安神経症などの精神疾患の病因と病態を説明できる。 てんかん及び睡眠障害の病因と病態を説明できる。 脳血管障害及びアルツハイマー病などの病因と病態を説明できる。</p> <p>《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(1)- -3~10</p>	泉 剛
8	感染、免疫・炎症・アレルギー疾患 資料を配付する。	<p>炎症の定義および炎症反応の経過を説明できる。 アトピー性皮膚炎、花粉症など代表的なアレルギー性疾患の発症機構を説明できる。 全身性エリテマトーデス、関節リウマチなど代表的な自己免疫疾患の発症機構を説明できる。 後天性免疫不全症候群(AIDS)など代表的な免疫不全症の発症機構を説明できる。 インフルエンザウイルス感染症など代表的な感染症の感染経路および経過を説明できる。 細菌感染症、ウイルス感染症、真菌感染症、寄生虫・原虫感染症について、それぞれ代表的な疾患をあげ、その特徴を説明できる。</p> <p>《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(2)- -1,3,5,8, -1 E2-(7)- -2,7, -3,5, -2, -2</p>	柳川 芳毅
9	血液・造血器系疾患 資料を配付する。	<p>各種貧血(鉄欠乏性、再生不良性、溶血性、巨赤芽球性)の病態を簡潔に説明できる。 止血機構の四要素と止血血栓形成におけるそれらの役割を説明できる。 代表的な血栓・塞栓症の成り立ちを簡潔に説明できる。 血友病、特発性血小板減少性紫斑病、播種性血管内凝固症候群(DIC)など代表的な出血性疾患の成り立ちと病態を簡潔に説明できる。</p> <p>《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》</p>	町田 拓自

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
		E2-(3)- -1~5	
10	悪性腫瘍 資料を配付する。	<p>身体の様々な臓器に発生する悪性腫瘍の成り立ちと病態について説明できる。</p> <p>《関連するモデルコアカリキュラムの到達目標》 E2-(7)- -1~3, -1~13</p>	遠藤 泰

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

期末定期試験（100%）として合否の判定を行う。

（正答率の低い問題については、解答と解説を「遠隔授業ポータルサイト（Google drive）で公表する。）

【教科書】

「コンパス 薬物治療学 改訂2版」 南江堂

【参考書】

「クイックマスター病理学 新訂版」 堤 寛 サイオ出版

「疾患と治療薬-医師・薬剤師のためのマニュアル」 南江堂

「疾病の病態と薬物治療」 廣川書店

「症候学的病態生理学」 巖本三壽 京都廣川書店

「薬物治療学 改訂10版」 南山堂

【備考】

必要に応じて講義プリントを配布する。

【学修の準備】

本講義は、後期並びに上級学年で開講される「薬物療法学 ~」を理解する上で必要な内容を多く含んでおり、学習範囲が多岐に及ぶため、疑問点を含めて講義内容のしっかりした理解に努めること。

当日の授業範囲を予習し、あらかじめ疑問点等を把握しておくこと（50分）。

授業終了時に練習問題等を課した場合は、次回の授業までに解答しておくこと（50分）。

復習として講義終了後早期に資料などをもとに内容を再確認するとともに（50分）、日常においても専門用語の内容や意味についてあらかじめ理解しておくこと（20分）。

【関連するモデルコアカリキュラムの到達目標】

E2 薬理・病態・薬物治療

(1) 神経系の疾患と薬

【 中枢神経系の疾患の薬、病態、治療】 -3~10

(2) 免疫・炎症・アレルギーおよび骨・関節の疾患と薬

【 免疫・炎症・アレルギー疾患の薬、病態、治療】 -1,3,5,8

【 骨・関節・カルシウム代謝疾患の薬、病態、治療】 -1~4

(3) 循環器系・血液系・造血器系・泌尿器系・生殖器系の疾患と薬

【 循環器系疾患の薬、病態、治療】 -1~5

【 血液・造血器系疾患の薬、病態、治療】 -1~5

【 泌尿器系・生殖器系疾患の薬、病態、治療】 -2~8

(4) 呼吸器系・消化器系の疾患と薬

【 呼吸器系疾患の薬、病態、治療】 -1~3

【 消化器系疾患の薬、病態、治療】 -1~8

(5) 代謝系・内分泌系の疾患と薬

【 代謝系疾患の薬、病態、治療】 -1~3

【 内分泌系疾患の薬、病態、治療】 -1~5

(6) 感覚器・皮膚の疾患と薬

【 眼疾患の薬、病態、治療】 -1~3

【 耳鼻咽喉疾患の薬、病態、治療】 -1,2

【 皮膚疾患の薬、病態、治療】 -1~4

(7) 病原微生物（感染症）・悪性新生物（がん）と薬

【 細菌感染症の薬、病態、治療】 -2,7

【 ウイルス感染症およびプリオン病の薬、病態、治療】 -3,5

- 【 真菌感染症の薬、病態、治療】-2
- 【 原虫・寄生虫感染症の薬、病態、治療】-2
- 【 悪性腫瘍】-1～3
- 【 悪性腫瘍の薬、病態、治療】-1～13

【薬学部ディプロマ・ポリシー(学位授与方針)との関連】

2. 有効で安全な薬物療法の実践、ならびに人々の健康な生活に寄与するために必要な基礎から応用までの薬学的知識を修得している。
3. 多職種が連携する医療チームに積極的に参画し、地域および国際視野を持つ薬剤師としてふさわしい情報収集・評価・提供能力を有する。

【実務経験】

遠藤 泰(薬剤師)、柳川 芳毅(製薬企業において創薬研究に従事)、飯塚 健治(医師)、泉 剛(医師)、町田 拓自(薬剤師)、大橋 敦子(獣医師)、鹿内 浩樹(薬剤師)、水野 夏実(薬剤師)

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関での医師、獣医師、薬剤師としての実務経験、並びに創薬に携わった実務経験を活かし、病態生理学に必要な知識についての教育を行う。